

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 117 号

-原田勉から引継いだ環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2003.09.11 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<新キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

\*\*\*\*\*発行部数 1709 部\*\*\*\*\*

---

<山崎農業研究所からのご挨拶> 「電子耕」の継承発行について

---

1999年7月創刊以来「電子耕」を主宰してきた原田勉（会員）から  
「電子耕」の継承を提起されました。

私たちは「電子耕」創刊以来、シンクタンク山崎農業研究所の所報  
「耕」の分身と考えて、会員の多くが読者になり、また編集同人として  
参加してきました。

私たちは創刊の原点に帰り、その編集方針を継承するとともに、  
タイトルとキーワードの一部を改定して編集・発行を継続すること  
になりました。

キーワードに新たに「環境」と「農村と都市との交流」を挙げたの  
は、現在の私たちの生活をとりまく水・土・大気・食べ物などの安全  
が脅かされていることを重視し、その情報交換を盛んにするとともに、  
問題解決にむけて、農村と都市の健全な関係を作り出すことが大事だ  
と考えたからです。

編集同人は山崎農業研究所の会員が中心になりますが、従来の編集  
同人も参加されます。

読者の皆さんも何とぞ今までの「電子耕」同様にご愛読くださって、  
<読者の声>欄にもどんどん投稿して交流されるようお願い申し上  
げます。

以上簡単ですが、継承のご挨拶とします。

なお、山崎農業研究所はどんな活動をしているかは、下記 HP をご覧ください。

山崎農業研究所

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

---

□ 目 次 □-----

<今週の提言> コメ 10 年ぶりの凶作を楽観する不幸 小泉浩郎

<読者の声>

増山さんから：福井さんから：丹羽さんから：藤本さんから：小坂さんから：  
齋藤さんから

<舌耕のネタ> メールによる一期一会 原田 勉

<山崎農業研究所情報>

◇『21 世紀水危機—農からの発想』を読む（その 1） 田口 均

<丹羽敏明の戦争体験> 17、文化厚生部勤務となる

<日本たまご事情> 「ヒヨコは誰がつくるの？」 愛鶏園・齋藤富士雄

<中学生に環境問題をどう教えるか？・1> 環境クラブ・増山博康

<編集同人の近況報告> 8 月 28 日～9 月 10 日

---

<今週の提言> コメ 10 年ぶりの凶作を楽観する不幸

---

農水省は先日、今年のコメの作況を「10 年ぶりの不作」と発表（8 月 15 日時点）、同時に、「在庫は十分にあり、供給は安心」とのコメントを述べた。

“10 年に 1 度の凶作だが不安になる必要はない”と政府が言うにはそれなりの理由がある。今年 10 月の予測在庫量は 150 万トン（政府備蓄米 140 万トンプラス民間在庫米 10 万トン）。年間予測需要量の 869 万トンから、この 150 万トンを差し引いた残りが 719 万トン。10 年前の大凶作の時でも、766 万トンの収穫があった。だから、その程度の不作になっても大丈夫という計算である。

10 年前とちがって、今年は隠し球も 2 つある。1 つは政府輸入米（ミニマムアクセス米）の在庫約 100 万トン、2 つは緊急食料支援のための備蓄 40 万トンである。いざとなればこちらも役立つ。

なるほど、数字の上では納得させられる。だが、数字あわせでつじつまが合うのは、たまたま今年だけのことかもしれない。来年どうなるか、将来どうなるかは全くわからない。

政府備蓄米が 140 万トンあるというが、その 70%は 99 年度産以前のもの。99 年度産米といえば「古古古古米」(!)である。また政府が毎年 100 万トンに近い米を輸入する一方で、国内では生産調整(減反)がすすんでいる。国内の水田面積 260 万 ha のうち約 40%ではコメが作れない。どこかちぐはぐなのである。

消費者は店頭には山と積まれるコメを見て、とりあえず安心している。政府は金のかかる在庫が減らせるいい機会だとみているふしもある。不安を抱いているのはコメ作りに汗を流した農家だけだ。この楽観ムードはどうにもおかしい。

小泉浩郎

山崎農業研究所 事務局長

y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<読者の声>

---

=====  
●08/28 増山博康さんから：

定期刊行の頃から連日の忙しさにかまけてあまり電子耕の発行日を覚えていなかったのですが、朝起きて、電子耕が入電していると

「あ、きたきた」と言う気持ちでした。

No.116 号については、また感慨ひとしおで、

「あ、最新号だ、原田さん出したんだ」って気持ちで迎えました。

新体制発足おめでとうございます。

原田さんの今後に期待しています。

=====  
●08/28 福井さんから：

家の周りの畑を、自耕園とよんでいます。

農薬や化学肥料は 40 年ほど使わないで、環境にやさしい自給自足を目指しています。

これまで黙って拝見しておりました。懐かしい人たちの様子もわかり、感謝しておりました。それに妻を多発性骨髄腫で4年前に亡くし、ご闘病の様子も、心配しておりました。私も農村組織の中で40年位前に20歳代で農業にかかわっており、その後企業を退職して今は自給畑をしております。

農業が社会で力を持ち、篤農家が活躍し、村に活気があった時代です。あのころの農業の指導者は、個性的で社会のために努力をしていました。これらの人の戦後の活動など、人物評も含めて残したいものと思っています。何か参考になるものがあればお教えてください。

関西はどちらかと言うと京都学派で、当時は東京と違う視野もありましたが、今となっては懐かしい思い出です。ご自愛の上、貴重なご経験をお聞かせいただきたいものです。

<http://www.nava21.ne.jp/~masaki-f/>

○原田からのコメント：

福井様

電子耕 116号に対するメール有り難うございました。

奥様のお悔やみ申し上げます。

私のタイプは IgGκ 2900 で告知から2年半ですが、その後進行せず、観察中です。免疫力を強めるため毎週鍼治療をしています。

そのせいかどうか、慢性型で保っています。しかしC型肝炎もあるので動脈硬化が進んで眼底出血にいたり、このため電子耕の主宰を交代することになりました。

今後ともコラムは連載しますので、どうぞ投稿してください。

こんどの〈読者の声〉もとても好いと思います。今後もよろしく。

-----

●08/30 丹羽敏明さんから：

116号の配信有り難うございました。新電子耕の方針が決まり良かったですね。これで少しはゆっくり養生に勤しんで下さい。

先日NHKの岸さんが来宅されました。『電子耕』に掲載して頂いた関係資料についてお話し申し上げました。久しぶりにメディア関係の方との語らいに軽い興奮と心地よい疲れを覚えました。

『丹羽敏明の戦争体験』17を続いて送信いたします。

-----  
●08/30 藤本一男さんから：

作新学院大学の藤本です。

8月3日から27日まで、韓国の延世大学にいました。向こうで、8/7のメルマガを受信していたのですが、帰宅してから、ゆっくり読もうと思ってほったらかしにしてました。そして次の8/26号から読んで、目の様子を知った次第です。

実は、以前から心配してました。当方も、原田さんよりはずっと若いとはいえ、仕事（パソコン必須）で、目を酷使したときに、極端に視力が落ち、緑内障の疑いありで、精密検査となったことがあります。

パソコンは、確かにすばらしいコミュニケーション・ツールではありますが、まだまだ身体には優しくありません。80年代に入って、労働現場にVDT（ビデオ・ディスプレイ・ターミナル、まあ、パソコンの画面ですね）が導入されたとき、労働運動の中でも、VDT使用規定を定めたところもありました。3時間つかったら、30分休憩、というようなものであったように思います。ところが、90年代の半ばのインターネット革命によって、24時間画面とお付き合いする環境が当たり前になってしまったように思います。

学生達に、目の疲れのことを話しますと、やはりそういうことだったんですね、という反応が多いです。大学に入って、ディスプレイを見る時間が増えることによって、原因不明（？）の頭痛や吐き気を感じている学生がずいぶんいます。でも、医者についても、風邪ですかね、ですまされてしまいます。

ひところよりは、目に優しくはなっているようですが、それでも、まだ、重労働なんだという自覚は必要のように思います。

原田さん。無理はしないでください。原田さんの文章は、のんびりまっています。

（長文を書くと、お読みいただくのに、また、目を酷使させてしまうとわかりながら、書いてしまいました。もうしわけありません。）

作新学院大学 人間文化学部

<http://www.sakushin-u.ac.jp/~fujimoto>

=====

●09/02 小坂さんから：

「旅」9月号は白神の特集です。37頁から紹介されているので、よかったらご覧ください。

=====

●09/04 齋藤富士夫さんから：

原田先輩

アブラゼミ、ミンミンゼミ、オーシツク、が短い夏を同時に鳴いています。おかしな夏です。

=====

○原田からコメント：

皆さんにご心配頂いてすみません。

私宛のメールには個別に返信していますが、特に申し上げたいことは、8月30日眼科診療の結果、「目を酷使しなければもう少し現状で保つだろう。血管の補強・止血剤を服用すること、2週間に一度の検診を忘れないように」となりました。

参考に岩波アクティブ新書67『あなたの眼は大丈夫？』本田孔士著を読んだら、「眼底出血を起こす中高年の病気」に詳しく出ていました。

<読者の声>藤本さんのご意見にあるように、現在は若い学生時代からディスプレイに囲まれていて、眼を酷使するようになっていきます。お互いに注意してパソコンは休み休み使いましょう。

---

<舌耕のネタ>メールによる一期一会

---

人は出逢いによってその後の人生に大きな影響を受けることがある。

「一期一会」は、茶会の心得から、生涯にただ一度まみえること。或いは、一生に一度限りの出逢いであることを言う。

私は茶会の経験はないが、晩年になって『電子耕』のメールによる出逢いでお互いに心を通わせ励ましを受け助かったことがある。

がんを告知され、悩んでいるときだった。まだ一度も逢ったことのない読者から「実は私もがんを経験して悩んだ。それも、余命半年と宣告されたが今でも元気にすごしている」とお互いに自分の弱みをさらけ出してメール交換した。メールでもここまで心を動かすことが出来るという貴重な体験であった。

最近では、「森 清の読後感」で多くを学び、励ましを受けた。森さんは、ある大学の副学長という忙しい身でありながら、昨年秋から 116 号まで 21 回にわたる書評という形のコラムを通じ、「がんを抱えながら健気にがんばっているメルマガ『電子耕』を応援してやろう」と連載して貰った。

おそらくインターネットやメルマガのなかった頃には考えられなかった現代的「一期一会」であった。一生忘れることの出来ない出逢いであった。

その書評は、単なる新刊紹介ではなく、多くが患者や介護の仕事など、すべて人生論に到るものであった。前回で終わったのは残念であるが、「森清のホームページ」の読書欄を開けば読むことができる。私はお気に入り登録して読んでいる。みなさんにも、ぜひお勧めする。

URL は

<http://homepage2.nifty.com/morikiyoshi/>

原田 勉

<http://nazuna.com/tom/>

---

<山崎農業研究所情報>

---

◇『21 世紀水危機—農からの発想』を読む（その 1）

——百姓仕事の水をつくる／宇根 豊

「水田の多面的機能」という言葉をご存じだろうか。

水田はイネの生産装置としてだけでなく、洪水を抑制・調節したり、地下水を涵養したり、生き物を育んだりする機能をもつ——というのがそのおおまか

な内容だ。この多面的機能という考え方はたとえばWTO交渉の場において日本農業を守る根拠のひとつとして主張されている。生産物は輸入できても、多面的機能は輸入できないからだ。

宇根さんは、この多面的機能という考え方を認めつつ、しかし、と言う。「水田があるから、水が保全されるのではない。水田を支える仕事があるから、水が守られるのである」。

畔塗り、畔草刈り、田まわり、水口づくりなどといった水田を支える仕事。これらを宇根さんは「百姓仕事」（土台技術）と呼ぶ。そして百姓仕事は「ムダなもの（自然環境など）をたっぷり育ててしまう。もちろん百姓は『コメ』の生産を目的にしているのだけれども、どうしてもカエルもユスリ蚊も彼岸花も育ててしまうし、洪水も防いでしまうのだ」と。

宇根さんによれば、多面的機能の評価はこの“ムダ”の意識的な評価である。これまでの農業技術はこの“ムダ”を効率性の名の下に排除してきた。少なくとも積極的に増進しようとする方向では進んでこなかった。そしてこの“ムダ”を評価し支援する習慣も政策もなかった。

だが時代は変わりつつある。食の安全・安心だけでなく、その安全・安心を支える自然環境——そこにはトンボやメダカやカエルといった水田とかかわりのふかい生き物も含まれる——の循環性や持続性へと関心は広がりつつある。そしてそのような関心の広まりに一役も二役も買っているのが、宇根さんたちの環境稲作の研究や田んぼの生き物調査だ。これらの取組みをつうじて、百姓仕事と自然との関係を解明し、多面的機能を意識的に生み出す技術をつくりだそうとしている。

ところで、水を「つくる」というのは傲慢な言い方ではないか、と思われる方もいるかもしれない。もちろん、人間は水そのものをつくることはできない。宇根さん自身、「本心としては、むしろ『できる』『とれる』と表現したい」と言う。なぜなら、百姓は、水が溜まり、流れ、生命を育み、循環するのを手助けするだけだから。

しかし、この百姓仕事なしには水は存在できない。できる水・とれる水は自然現象ではない。水田の多面的機能は、「機能」という言葉が連想させるような、自動的に発揮されるものではないのである。だから宇根さんはあえてこう



言うのだ。「百姓仕事の水をつくる」と。

田口 均

山崎農業研究所会員、編集者

y.noken@taiyo-c.co.jp

『21世紀水危機—農からの発想』の内容・構成はこちらから

<http://www.ruralnet.or.jp/nbklib/book/03wadai008.html>

宇根豊さんが代表理事を務めるNPO法人農と自然の研究所のHP

<http://hb7.seikyoku.ne.jp/home/N-une/>

本のご注文は山崎農業研究所へ

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

---

<丹羽敏明の戦争体験>17、文化厚生部勤務となる

---

連日の重労働に私はついにダウンした。微熱がとれなくなり、練兵休（演習に出ずに内務班で休養すること）となった。お陰で重労働に出なくてもよくなった代わりに、中隊の事務室になっているテントで事務をとりながら、1日1回は医務室へ行って診察を受ける日々を過ごしていた。そんなある日、作業隊本部に呼び出され、文化厚生部勤務を命じられた。文化厚生部の事務室は本部事務棟につながる建物の一角にあって、翌日からそこへ住み込むことになった。今まで寝食を共にしてきた仲間からはずれるのは辛かったが、作業に出られないための引け目を感じなくてすむようになったことでホッとした。

文化厚生部の構成は、部長が士官学校出の陸軍大尉、副部長が海軍の主計中尉、あとは実務者として新聞社の支局長経験者が1人、それに私と、ガリ版印刷の達人が1人の5人で、ここに寄宿するのは部長・副部長を除いた3人である。仕事は、タブロイド版の新聞『大和』の週間発行、雑誌形体の月刊誌『新泉』（A5版）の発行である。私は雑誌担当である。8千人近い隊員の中から何故私が選ばれたのか、履歴書には入隊前の職業欄に雑誌編集と書いておいたが、隊員の中には立派な経歴のジャーナリストがいくらもいたと思われるのに、私に白羽の矢が立ったのが不思議で仕方がなかった。選考書類の私の順番が早かったのか、それともたまたま練兵休で作業を休んでいる私の履歴を見て「ちょうどいい。こいつを採用しよう」ということで選ばれたのか。いずれにしても私にとっては最大の幸運であった。

編集方針をどうするかについて部長からは何も指示がないので、私の意見として、隊員が雑誌に望んでいることは、第一に内地の実情に関する情報、次に望郷の念を発散させ癒してくれる内容、この二つを基幹的内容として編集しようと思いますと具申し、了承を得た。とりあえず、巻頭言に部長の挨拶、その他は内地から届いた新着の雑誌の中から、戦後の識者の考え方や社会の動静などを知るのに適当な論文や随筆などを転載した。転載の許可を得ることは、捕虜の境遇では如何ともし難いので御勘弁願うことにした。また、予め読者からの投稿（エッセイ、詩、短歌、俳句、川柳など）を募集したが、締め切りまでには余り応募がなかった。やむなくページを増やすためと、投稿を促すための呼び水として私自身がコントまがいの創作を書いて載せることにして、とにかく創刊号を出した。読者からの反響はなかったが、私のコントを見て編集室を訪ねて来てくれた人がいた。かなり年輩の人で早稲田の文科を出て徳田秋声の家に下宿をしながら作家修行をしたという人だった。私がいまだ若かったので驚いていたが、コントは面白かったと褒めてくれて（まあお世辞でしょうが）、何か書いて投稿することを約束してくれた。

文化厚生部での生活はまことに快適であった。部長は依頼された原稿を書くとき以外はほとんど席にいなかったし、副部長も毎日ちょっと顔を出して本部の事務室へ行ってしまう。私は久しぶりに昔とったきねづかで懐かしい編集の仕事に没頭していた。

---

#### <日本たまご事情>ヒヨコは誰がつくるの？

---

採卵用のヒヨコをつくる種鶏孵卵業界がすっかり変わってしまった。  
その激動の歴史はそれだけでひとつの物語となる。

私は採卵養鶏家サイドにいて、専門農協による種鶏孵卵事業にかかれこれ30年以上携わってきたが、これはとても難しい仕事だ。

個人企業でそれこそオヤジがシャカリキになってやっても難しい仕事なのに、まして組合での経営となると尚更だ。

そういうわけで、30年まえ全国で実質的に活躍されていた孵卵場は500軒以上あったものが現在ではその一割もない、専門農協では私どもの神奈川養鶏連のみとなってしまった。

幸い組合は人を得たことと、これを支えた採卵家の連携プレーで設立いらい

50年持ちこたえることができた。

採卵養鶏家にとって困ることは、選択できる孵卵場の数が減ってしまうことと、同時に選択できる鶏種が少なくなってしまうことだ。

ところが現実にはこの30年間確実にその方向に向かっているし、近い将来さらにそれは進むであろう。

そのなかで専門農協として孵卵場が生き残る道は一つしかない、それは「さらなる採卵家との連携プレー」につきるであろう。

機能分担して、ヒヨコをつくる人、タマゴをつくる人が一体となってことに当たる、幸い食品の安全性が問われる今、本当に安全なタマゴをつくるには、ヒヨコにまでさかのぼる必要がある。

「自分たちのヒヨコは自分たちでつくる」組合設立の原点に立ち戻らざるを得ない。

齋藤 富士雄

(株)愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

---

<中学生に環境問題をどう教えるか?・1>

---

川口市制70周年記念のWAIWAI市民委員会

(学校支援)の委員を引きうけています。

今度9月6日に「学校にどんな人達が関わっているか」をリストアップするワークショップを開催することになりました。

川口の市民委員会では、「学校」に対する市民の人達の意見(主観)をいったんおいてもらって、地域の中で学校に関わっている人達にはどのような人達がいるか、全て洗い出して、いったん、「全体像」を把握する、

その上で、自分の主観の意味を理解してもらおう。

人は素朴な認識では、太陽が動いていると感じますが、

真実は地球が動いている、これには抽象思考が必要になります。

「市民参加」型の街作りが今の水準を越えるには、  
「市民」が抽象思考に基づく全体把握に習熟するかどうか  
が必要だと考えています。

川口のワークショップはおそらく日本初、ことによれば  
世界初の「地動説」型思考による市民参加の実験に  
なるのではと思っています。

環境クラブ 増山 博康

<http://www.ecoclub.co.jp>

---

<編集後記・同人の近況報告> (8月28日~9月10日)

---

・8月29日から『電子耕』編集引き継ぎの用件はメーリングリストで交流。  
・編集同人原田勉は8月29日から近藤康男の秘書として先生の自宅に毎週金曜日、図書整理と話相手に通っている。104歳の超長寿者も老化には勝てず脚が弱くなり転びやすく農文協図書館に通勤できなくなったからである。

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名（見出し）を必ず書くこと。読みたくなる見出しを簡潔・明瞭に。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的にズバリと書き出す。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めの方に書く。
- 3、1回1テーマ、書き出し・本文・結論を10行位にまとめる。
- 4、送信する前に、何を言わんとするか、読み返し、推敲することが大切。
- 5、ホームページを持っている人は、文末にURLをつける。
- 6、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックをする。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。htmlメールもご遠慮ください。

-----  
次回 118号の締め切りは9月19日、発行は25日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：本体 700 円＋税 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 117 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2003.09.11（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』 \*\*\*\*\*